

第3回写真「1_WALL」展

2010年9月21日(火)～10月14日(木)

公開最終審査会

2010年10月1日(金) 6:00p.m.～8:30p.m.

写真に対するまっすぐな姿勢と今後の活躍に期待があつまりグランプリに！

部屋に差し込む自然光を穏やかな眼差しで捉えた作品で受賞。厳しい課題を与えられながらも審査員の満票を得て、一年後の個展のチャンスを手に入れました。

受賞作 「Lights」

人々の部屋を“光を見るための装置”と捉え、無事件のまま過ぎていく日常に光がたちあげる尊い存在を感じる時間を、永遠のものとして定着させるためにこの作品をつくりました。



審査員コメント

金村修

「部屋にカメラをおいてポンと撮ったような、余計なことを考えていないシンプルさが面白い」

鈴木理策

「求めていることが面白いし、共感できる。今後に期待が持てる人だ」

鳥原学

「審査員からの批判をとらえて、これからどう覚悟をもってやっていくのかに賭けてみたい」

町口覚

「断トツにポートフォリオが良かった。眼差しがスレてなくていい」

光田ゆり

「自然光のなかに写っているものを肯定している感じが、幸せ感がでていて好きです」



金瑞姫 Mizuki Kin

1987年4月22日生まれ

東京都出身

2010年多摩美術大学情報デザイン学科情報芸術コース卒業

東京藝術大学院美術研究科先端芸術専攻在学中



FINALISTS ※五十音順

天野祐子

いしかわみちこ

伊藤哲郎

神崎雄三

金 瑞 姫

山野浩司

JUDGES ※五十音順、敬称略

金村 修 (写真家)

鈴木理策 (写真家)

鳥原 学 (写真研究者)

町口 覚 (アートディレクター)

光田ゆり (美術評論家)

■ファイナリストのプレゼンテーションと質疑応答の概略



金 瑞姫 Mizuki Kin
「Lights」



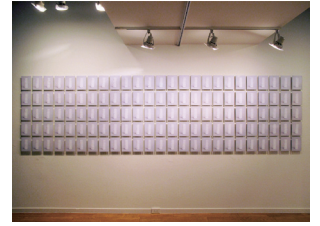
人が暮らす部屋を「光を見るための箱」として捉え、作品を作った。写り込んだ部屋の家具や日用品は光を可視化するための道具であり、個々の生活などのドキュメンタリー性は重要ではない。人が過ごす空間に光がたちあがる尊い存在を感じる時間を、永遠のものとして定着させたかった。

〈質疑応答〉

- 鈴木: 最初の展示予定が4~5点だったものを2点にした理由は?
- 金: 与えられた場所で作品が一番良く見える大きさ、余白等を考慮した。
- 町口: シリーズの作品25点の中から、この2点を選んだ理由は?
- 金: 右側の作品に思い入れがあり、その写真に合うもう1点を選んだ。
- 光田: ポートフォリオの写真と大きくプリントした写真の色彩が違うが?
- 金: プリントして展示したものが最終形態だと思っている。



山野 浩司 Koji Yamano
「ルール」



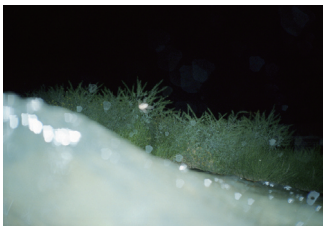
一見意味深だが無意味なものに対して、見る人の反応は十人十色で面白い。ペットボトルの蓋をモチーフにした理由は、日常目しているのに特定のイメージが湧きにくく、それ自体ではモノとして成立していないから。積み上げが作画的にならないよう6個積み上げては撮影するという反復のルールを作って撮った。

〈質疑応答〉

- 町口: なぜ、ペットボトルの蓋を6個にしたの?
- 山野: 積み上げるのが5個では容易すぎて、7個では難しかったから。
- 金村: 無意味を強調しているが、積み上げる行為に意図を感じるが?
- 山野: 作者の行為の結果は残しながら無意味なものを提示したい。
- 鳥原: 1点1点を独立させた展示にした理由は?
- 山野: 1点1点を強調させて反復感を出したかった。



神崎 雄三 Yuzo Kanzaki
「ive」



情や偏見はもの見方を歪める。だから、感覚だけで光をとらえる表現をめざした。過去に見たものから写真を撮られることを避け、写真を自由にするためにノーファインダー、セルフタイマーで撮影した。あえて画素数を落として大きく引き伸ばすことで、粗く見えるような展示にした。

〈質疑応答〉

- 菅沼: あなたにとって写真を自由にするとはどういうこと?
- 神崎: 無意識のうちに既視感のある写真を撮ることから離れること。
- 鈴木: 写真は何がどう写ろうがそれを撮る人が引き受けていくことが魅力的なのに、それを後回しにして、ノーファインダーとかセルフタイマーとか言い訳が多い気がする。
- 光田: なぜ、この2点を選んで展示したか?
- 神崎: いままで評価がなかった2点を選んでみた。



いしかわみちこ Michiko Ishikawa
「A」



昨年の夏に自宅の玄関先で痴漢に襲われた。世の中にとっては些細なことだが、私にとってはとても重大な事件だったので、その体験をもとに写真を撮り作品にした。一番伝えたかったことは、自分の中に残った「黒い何か」を外に追い出したかったこと。今それと向き合う時だと思った。

〈質疑応答〉

- 光田: 展示作品の中でどうしても見せたい1点はどれか?
- いしかわ: スルシートの上に服を置いた写真が核となる。
- 金村: 事件の再現性を伝えるためのインスタレーションなの?
- いしかわ: 再現しなかったのではなく、モヤモヤ感を出したかった。
- 鳥原: ポートフォリオの面白さが展示では消えてしまったか?
- いしかわ: 私としてはこの展示で伝わらと思った。



天野 祐子 Yuko Amano
「around a pond」



昨年の5月に鳥がたくさんいる景色を見て以来、ひとつの沼を撮っている。同じ場所なのに鳥がいたり、光が当たっていたり、常に変化している。8月の終わりに水が一滴もなくなり、その跡に草が生えてきた。今を見ることは、過去と未来を見ていることだと強く思い、写真を撮り続けている。

〈質疑応答〉

- 鳥原: なぜ、この3点を選んで展示したの?
- 天野: その沼に確かにあった記憶を表したくて3点にした。
- 菅沼: どのくらいの頻度でこの場所に通っているの?
- 天野: 週に2回は通っている。記憶のことを考える場所。
- 光田: このテーマでの作品はもう完結しているの?
- 天野: 沼が土になり変化していて、1年間は撮らうと思う。



伊藤 哲郎 Tetsuro Ito
「僕の郊外」



車やバイクが走り、街並みが続き、些細な暮らしが垣間見える風景にリアリティを感じる。そういう視線で長らく過ごしてきた郊外を、カメラをぶら下げて歩きながら撮っている。僕の写真を通して、そこに住んでいる人もそうでない人も郊外の姿を見つめ直してもらえたらいいと思っている。

〈質疑応答〉

- 町口: この郊外の作品の次にはどんなテーマで撮りたいの?
- 伊藤: 素直に自分が興味をもちたいものを撮りたい。
- 金村: ほとんどの写真がピントの位置が同じだが?
- 伊藤: 被写界深度をしっかりとることを意識している。距離感や光など自分の好きなものを撮っている。
- 光田: 撮影の時間帯は一定のようだが?
- 伊藤: だいたい午後から夕方にかけて撮影する。

■審査員の感想

ファイナリスト全員のプレゼンテーションが終わり、進行の菅沼さんが各審査員に全体的な感想を聞いた。鳥原さん：「ポートフォリオレビューでこの6人を選んだわけだが、ほとんどの人が展示よりもポートフォリオの完成度のほうが高かった。プレゼンテーションでは自分の気持ちを理論化しているが、総じて浅く感じた」。町口さん：「ポートフォリオレビューに参加した30人の中から今日の6人が残ったが、断トツで突破した人はいない。展示を見た印象も突出した人はいなかった。その中で自分の写真に対して真摯な態度の人が印象に残った」。鈴木さん：「ほとんどの人が展示のプリントのクオリティが物足りなかった。最終的にどういう形で見せるかという目的意識を感じられない。展示に際しての選択肢は多くあるのに、その辺りの詰め作業がもっとほしかった」。光田さん：「かなり辛つな意見を言われた人もいたが、こんなに厳しく作品について言ってもらう機会はずうそうないので、絶対に勉強になると思う。展示は本当に難しいもの。ほとんどの人が失敗しているが、くり返しの中で体得していったほしい」。金村さん：「展示はみんな悪かった。それは仕方がない。今の段階で失敗するのはいいこと。少し前の時代と比べると自意識過剰な展示が減っている。自分が希薄になっているのかなという印象を受ける」



続いて、ファイナリスト一人一人に対する感想を述べてもらった。金さんの作品について。鈴木さん：「作者本人が作業の中で求めているものには共感できる。写真を選ぶ際に、撮影の作業と展示の目的をもっと意識して試行錯誤していったほしい。今後に期待の持てる人だと思う」。金村さん：「シンプルな撮り方が面白い」。鳥原さん：「住んでいる人の情報は関係ない、という説明だったが、そういう生活感の写真に写り込むもの。それはあっていいのではないかと思っている」。光田さん：「自然光による幸福感が写っている部屋の住人を肯定している写真だと思う。そこに好印象をもてる」。町口さん：「ポートフォリオが良かった。作者の眼差しがぶれてなくて良かった。展示はこれから勉強していけばいい」。山野さんの作品について。光田さん：「70年代のコンセプチュアルアートと似た表現だが、それとは別でロマンではない部分で作品を作っている。ただ、自分の作品づ

くりに対する思想が乏しく、惜しい」。町口さん：「ポートフォリオでは期待感があったが、展示が全然面白くない。考え過ぎずにストレートにやればいいのに」。鈴木さん：「展示は気合が入り過ぎて失敗している。別のメディアでやったほうが良いテーマかも」。神崎さんの作品について。鳥原さん：「自分の写真表現に対する覚悟が足りないのでは。ポートフォリオが良かっただけに残念」。町口さん：「ポートフォリオの中から展示で2点を選ぶときに、試行錯誤して自分が一番良いと思ったものを提示してほしかった。他人の評価によるセレクトの仕方は嫌い」。光田さん：「感情や自身の気持ちを排除した写真は言いながら、川の飛沫などエモーショナルなものが写り込んでいる。それを機械的な撮り方で撮ったところが面白かった。ただ、そのズレ感が展示には全く出ていなかった」。鈴木さん：「いくらセルフタイマー、ノーファインダーにしようが、作者が撮った形跡は残るもの。もっと徹底すれば良かったかも」。いしかわさんの作品について。鳥原さん：「ポートフォリオの生の感じが面白かったのに、ちょっといじり過ぎた」。金村さん：「ポートフォリオにあるこれまでの作品は明快でいいものもあった。本人のキャラクターも面白い。このテーマが明快ではなかったのかも」。光田さん：「ポートフォリオの工夫が展示で活かされなかった」。町口さん：「スケールの小さい展示で損をしている」。天野さんの作品について。光田さん：「フレーミングと写真が合っていて、展示も良かった」。金村さん：「単純に気持ちいい写真。20枚30枚と数多くあってもいいかも」。鳥原さん：「今、この場所を撮っていきたいという未来の志向を追求しているのは、この人だけだった」。鈴木さん：「もっとみたいと思わせる展示だった。かなりの枚数を展示していたら、見応えがあったと思う」。伊藤さんの作品について。鳥原さん：「プレゼンテーションが一番面白かった。やりたいことはあまりなくても、好きな光を求めて写真を撮っていくということに期待を感じる」。鈴木さん：「優等生的な写真。欲を言えばもう少しはみ出しているといいと思う」。金村さん：「月にどのくらい撮ってる？ 6×7で30本？ もっと多く撮ってもいいね」。光田さん：「光がきれいに見えるように考えぬかれ、写真の配置もすごくうまい。“僕の郊外”というタイトルがちょっと演歌っぽくて意外性があった」



くりに対する思想が乏しく、惜しい」。町口さん：「ポートフォリオでは期待感があったが、展示が全然面白くない。考え過ぎずにストレートにやればいいのに」。鈴木さん：「展示は気合が入り過ぎて失敗している。別のメディアでやったほうが良いテーマかも」。神崎さんの作品について。鳥原さん：「自分の写真表現に対する覚悟が足りないのでは。ポートフォリオが良かっただけに残念」。町口さん：「ポートフォリオの中から展示で2点を選ぶときに、試行錯誤して自分が一番良いと思ったものを提示してほしかった。他人の評価によるセレクトの仕方は嫌い」。光田さん：「感情や自身の気持ちを排除した写真は言いながら、川の飛沫などエモーショナルなものが写り込んでいる。それを機械的な撮り方で撮ったところが面白かった。ただ、そのズレ感が展示には全く出ていなかった」。鈴木さん：「いくらセルフタイマー、ノーファインダーにしようが、作者が撮った形跡は残るもの。もっと徹底すれば良かったかも」。いしかわさんの作品について。鳥原さん：「ポートフォリオの生の感じが面白かったのに、ちょっといじり過ぎた」。金村さん：「ポートフォリオにあるこれまでの作品は明快でいいものもあった。本人のキャラクターも面白い。このテーマが明快ではなかったのかも」。光田さん：「ポートフォリオの工夫が展示で活かされなかった」。町口さん：「スケールの小さい展示で損をしている」。天野さんの作品について。光田さん：「フレーミングと写真が合っていて、展示も良かった」。金村さん：「単純に気持ちいい写真。20枚30枚と数多くあってもいいかも」。鳥原さん：「今、この場所を撮っていきたいという未来の志向を追求しているのは、この人だけだった」。鈴木さん：「もっとみたいと思わせる展示だった。かなりの枚数を展示していたら、見応えがあったと思う」。伊藤さんの作品について。鳥原さん：「プレゼンテーションが一番面白かった。やりたいことはあまりなくても、好きな光を求めて写真を撮っていくということに期待を感じる」。鈴木さん：「優等生的な写真。欲を言えばもう少しはみ出しているといいと思う」。金村さん：「月にどのくらい撮ってる？ 6×7で30本？ もっと多く撮ってもいいね」。光田さん：「光がきれいに見えるように考えぬかれ、写真の配置もすごくうまい。“僕の郊外”というタイトルがちょっと演歌っぽくて意外性があった」

■審査員による投票

一人一人に対する意見交換の後で、各審査員にグランプリ候補を2名ずつ投票してもらった。その結果は……

- 金村/金 いしかわ
- 鈴木/金 伊藤
- 鳥原/金 天野
- 町口/金 伊藤
- 光田/金 いしかわ

票を集計すると、金5票/いしかわ2票/伊藤2票/天野1票

「票の上では金さんに審査員全員の票が入り5票でトップになりました」と菅沼さんが進行し、この結果に異論はないかと各審査員に促す。しばし沈黙の後、5人の審査員は納得顔で異論が出ない。町口さんが「もう一度、金さんに個展プランを聞いてみよう」と声をかけ、金さんが「光を見る」というテーマで現在はホテルの部屋で人を撮りながら、朝日が差し込む様子を表現している。それを展示できたらいいと、一年後の個展プランを発表する。続いて、票が入った人にも聞こうということになり、いしかわさんは「今日、いろいろな意見をいただいたことを参考に、今のテーマで展示したい」。天野さんは「今回のテーマで一年間撮りためた写真を展示したい」。伊藤さんは「もっと枚数を撮って一年後に臨みたい」と、4名の個展プランを聞いたところで、再び各審査員の意思を確認したが心変わりはない。ここで菅沼さんが「では、第3回写真『1_WALL』のグランプリは、金瑞姫さん」と高らかに宣言。超満員の会場からわれんばかりの拍手が起こった。審査員の町口さんからトロフィーが授与され、金さんが「ありがとうございます。グランプリはいただきましたが、課題もたくさんいただいたので、一年後の個展はもっとがんばらなくてはと思っています」とあいさつして公開審査会を締めくくった。



■ファイナリストインタビュー

○金 瑞姫さん：公開審査の場では審査員の方たちから厳しく辛つな意見があったので、グランプリという結果には驚いています。でも、いただいた意見は私にとって大事なことばかり。今日言われたことをしっかり意識して、今後の撮影や一年後の個展に向けてがんばりたいです。この作品はいろんな人の協力があって完成したものの。その人たちにこの結果を伝えたいし、とても感謝しています。

○山野浩司さん：これまででは自分の作品を展示する機会も意見を言ってもらう機会もなかったもので、今回の体験はとても勉強になりました。「考え過ぎている」というアドバイスが印象的でした。また作品を撮ってがんばります。機会があれば、また出展したいですね。

○神崎雄三さん：プレゼンテーションでは嘘をつかずに思ったことを言えただけ疲れしました。公開審査はいろいろと勉強になりますね。去年までサラリーマンをやっていた自分が、今回ファイナリストの6名に残れたわけだし、結果には満足しています。これを今後につなげたいです。

○いしかわみちこさん：結果は悔しいですね。でも、2票が入るなど良い評価をいただいて素直にうれしいです。ありがとうございます。いろいろと意見を言ってもらい、今後の改善点もわかりました。展示は自分ではベストだと思ったんですが……もっとカッコよくできるといいですね。

○天野祐子さん：審査員の方に意見をいただいて勉強になりました。私の作品は良くも悪くも平均点なのかな？ もっとインパクトを与えるようなことを模索したいですね。同じテーマでも、もっと時間をかけたり、量を撮ったり。将来的には写真一本で食べていけるようになりたいです。

○伊藤哲郎さん：ファイナリストの他の作品はみんな素晴らしいものばかり。グランプリの作品も妥当だと思います。審査員の方に「作品が完成し過ぎている」「もっと量を撮れ」と言われたことが印象的でした。これからも自分が好きな写真を撮っていければいいと思っています。

<文中一部敬称略 取材・文/田尻英二>